

Title	メタフュシカ 第39号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 39 P.111-P.114
Issue Date	2008-12-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4653
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

【彙報】

○ 哲学哲学史・現代思想文化学

現在、学部の哲学・思想文化学専修には、2年生6名、3年生4名、4年生13名が在籍しています。大学院の哲学哲学史専門分野には、博士前期課程6名、後期課程4名が、大学院の現代思想文化学には、博士前期課程5名、後期課程6名が在籍しています。他に学術振興会研究員が2名在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、重田謙助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「17世紀近世哲学における様相の問題Ⅶ」「デカルトとラカン」「スピノザ『エチカ』を読むⅣ」「ドゥルーズを読む」(上野教授)、「アприオリな知識と共有知 (1), (2)」 「Reading and Discussion on Mind-Body Problem in English」「Reading and Discussion on John McDowell “Mind and World” in English」「論理学初級 (1), (2)」(入江教授)、「カントと認識論の諸問題」「J.ハーバーマスの思想Ⅱ」「カント『純粹理性批判』を読むⅧ,Ⅸ」「ドイツ哲学基本文献購読Ⅰ,Ⅱ」(舟場准教授)、「現代哲学史概説」「ニーチェの歴史思想 (2), (3)」 「フロイトの『トーテムとタブー』 (2), (3)」(須藤教授)、「オルターグローバリゼーションの思想」(望月教授)、「科学技術と市民」「技術論と技術の哲学」「科学論の現在」(中村准教授)という題目で行なわれています。また、その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行なわれ、活発な研究・討論が行なわれています。

また非常勤講師としては、上枝美典先生(福岡大学)に「西洋中世哲学における神の存在論証」、大庭健先生(専修大学)に「倫理学基礎論—道徳的特性の实在性」、檜垣立哉先生(大阪大学大学院人間科学研究科)に「ドゥルーズのベルクソン論を読む」という題目で講義していただいています。

哲学を音声で伝える試みとして、ウェブ・ラジオ局「ラジオ・メタフュシカ」(<http://radio.metaphusika.net>)を開局し、研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。この雑誌は本誌『メタフュシカ』とあわせて、研究室のHP (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy>)の「出版物」のページから閲覧することができます。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、*handai metaphysica* を開催しています。特別講演会としては2008年1月11日にはラインハルト・プラント教授(マールブルク大学)に「カントの人格概念」という題目で、同年7月11日にはマティアス・ルッツ＝バッハマン教授(ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学)に「世界共和国によるグローバルな平和? 国際的に平和を保障することの諸問題」という題目で、同年12月12日には大庭健教授(専修大学)に「自己知をめぐる最近の議論から」という題目で講演していただきました。また、研究例会としては、同年3月18日に須藤教授・入谷氏(大阪大学非常勤講師)・田中潤一院生(当時、現札幌大谷大学講師)

の各論文（『メタフュシカ』第38号掲載）の合評会を行い、また同年8月4日には、上枝美典教授（福岡大学）に「トマス・アクィナスの存在の思想について」という題目で発表していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

北海道大学大学院応用倫理研究教育センター主催の第2回応用倫理国際会議（2007年11月22日－25日）において中村准教授が“Responsible Science in the Making: Communication among/beyond Scientific Community”という題目で講演を行いました。

独日倫理コロキウム「グローバル化の時代における倫理」Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium – Ethik im Zeitalter der Globalisierung（2007年11月23日、於早稲田大学ヨーロッパセンター、ボン）において舟場准教授が“Wie sollen Normengeltungen diskutiert werden?”という題目で研究発表を行いました。

日本科学史学会生物学史分科会関西月例会（2007年11月25日、於エル大阪南）において百崎院生が「ラ・メトリ『人間機械論』を読む」という題目で研究発表を行いました。

GUNI-AP (The Global University Network for Innovation-Asia and the Pacific) の2007年年会（2007年12月3－4日）において中村准教授と望月教授が“Undergraduate Education for the 21st Century: What can we learn from the Graduates?”という題目で講演を行いました。

チュラロンコン大学文学部哲学科（2007年12月18日、於バンコク）において望月教授が“Special Lecture on Modern Japanese Philosophy: Watsuji Tetsuro’s Philosophy of Climate and Ethics”という題目で講演を行いました。

上野教授が共著者となっている『ドゥルーズ／ガタリの現在』（平凡社）が2008年1月に刊行されました。

独日カントコロキウム Deutsch-japanisches Kant-Kolloquium（2008年1月19日、於ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学、フランクフルト）において舟場准教授が“Die kantische Philosophie aus der Sicht der kommunikativen Rationalität”という題目で研究発表を行いました。

早稲田大学グローバルCOEプログラム「実践の科学知」教育研究拠点主催の第1回研究倫理セミナー（2008年2月29日）において中村准教授が「研究倫理をめぐる国内外の現状と課題」という題目で講演を行いました。

山口院生が、第2回ライブニッツ研究会（2008年3月13日、於学習院大学）において「神と個体との関係について－ライブニッツとクザヌス－」という題目で、また日仏哲学会2008年度春季大会（2008年3月22日、於同志社大学今出川キャンパス）において「ライブニッツにおける記憶と同一性の問題」という題目で、また日本哲学会第67回大会（2008年5月18日、広島大学東広島キャンパス）において「‘tag’としての実体的紐帯－ライブニッツの個体論との関連から」という題目で研究発表を行いました。

ルーク・マリク院生が、国際会議「分析哲学とアジアの思想」An International Conference Analytic Philosophy and Asian Thought（2008年3月19日、於京都大学メインキャンパス）において“Kripke and Zen”という題目で研究発表を行いました。

プレイステーション3で配信されている情報番組「トロ・ステーション」の第501回「サイエ

ンス・カフェに行ってきた！」(2008年3月23日配信分)に中村准教授が出演しました。

須藤教授が共著者となっている『哲学の歴史(12)実存・構造・他者』(中央公論新社)が2008年4月に刊行されました。

教育環境のデザイン分科会(DEE)(2008年5月10日、於慶應義塾大学三田キャンパス)において上野教授が「スピノザと心理学-彼らは身体に何ができるか知らない」という題目で講演を行いました。

公開セミナー「サイエンスカフェの現在~デンマークと日本」を、2008年5月22日に大学教育実践センターと共催し、クリスチャン・ヴィトフェルト・ニールセン助教授(デンマーク・オーフス大学理学部科学論学科)に講演していただきました。

2008年度哲学若手研究者フォーラム(2008年7月19日、於国立オリンピック記念青少年総合センター)において上野教授が「ライブニッツとスピノザ-現実性をめぐって」という題目で講演を行いました。

第22回世界哲学学会 The XXII World Congress of Philosophy(2008年7月30日-8月5日、於ソウル国立大学)において入江教授が“‘Our’ Practical Knowledge”(8月3日)という題目で、重田助教が“Dissolving the Skeptical Paradox of Knowledge via Cartesian Skepticism based on Wittgenstein”(7月30日)という題目で、L.マリク院生が“Kripke’s Modal Argument and Practical Relevance”(8月3日)という題目でそれぞれ研究発表を行いました。

独立行政法人理化学研究所主催の「理研サイエンスセミナー」(2007年11月より2008年3月まで全3回)、独立行政法人科学技術振興機構主催の「科学と音楽の夕べ 生命への視線-科学と芸術の交わる場所」(2008年8月22日)において、中村准教授がナビゲーターを行いました。

2008年6月から9月まで、望月教授がタイ・チュラロンコン大学文学部哲学科において客員教授として講義・演習を行いました(講義題目“Seminar in History of Philosophy (Descartes)”, “Selected Topics in Epistemology”)

生島弘子院生が2008年4月からドイツ・ミュンヘン大学に、また昨年に引き続き、前田秀明院生がドイツ・ミュンヘン大学に、富岡基子院生がフランス・高等研究院(EHESS)に留学しています。また安里淳院生が2008年2月に留学先のドイツ・ミュンヘン大学から帰国しました。

(重田)

○ 臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生26名、大学院生前期課程9名、後期課程7名である。

本年4月より浜渦辰二教授が静岡大学より当研究室に着任した。浜渦教授のほか、中岡成文教授、本間直樹准教授(兼任)、家高洋助教の各教員スタッフが、哲学哲学史、現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に当たっている。

本年11月23日に倫理学研究室の岸畑豊名誉教授が逝去された。享年86歳であった。岸畑名誉教授は、1922年生まれ。1943年京都帝国大学文学部哲学科卒業。1950年大阪大学教養部講師(倫

理学) 着任、1951 年助教授に昇任。1952 年文学部倫理学に配置換えで着任、1968 年教授に昇任。1976 年から 1978 年まで文学部長就任。1985 年停年退官。

岸畑名誉教授のご専門は、イギリス倫理思想史であり、主な著作は、『ホッブズ哲学の研究』、『ホッブズ哲学の諸問題』(ともに創文社、1974 年刊)である。また、岸畑名誉教授は、関西倫理学会の委員長を第 17 期から第 21 期まで務められた(1981 年～1991 年)。

本年度は非常勤講師として、小林傳司教授(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)に科学技術論を、霜田求准教授(大阪大学大学院医学系研究科)に生命倫理を講義して頂いた。また、紀平知樹招聘准教授(大阪大学大学院文学研究科)に環境倫理についての集中講義を担当して頂いた。

本年 1 月に鷺田清一総長と永江朗氏の共著『哲学個人授業 - <殺し文句>から入る哲学入門』(バジリコ)、2 月に鷺田総長の『からだ教育 - 考えよう自分のからだ』(市村出版)、10 月に鷺田総長と内田樹氏の共著『大人のいない国 - 成熟社会の未熟なあなた』(プレジデント社)が出版された。また、3 月に中岡教授責任編集の『フロイト全集 第八巻 機知』(岩波書店)、10 月に中岡教授責任編集の『岩波講座 哲学 04 知識/情報の哲学』が刊行された。

本年度の講義・演習は以下の通りである。

「臨床哲学ネットワーク C・D」(中岡、浜渦、本間)、「臨床哲学概論」(中岡、浜渦、本間)、「倫理学の研究方法 C・D」(中岡、浜渦)、「自己変容の哲学 3・4」、「ヘーゲルを読みぬく」(以上、中岡)、「フッサール現象学の可能性」、「外国語文献演習」、「ケアの人間学」、「死の臨床を考える」(以上、浜渦)、「メルロ＝ポンティを読む (3)・(4)」、「哲学的コミュニケーションの探求と実践 (3)・(4)」、「思考の活動とメディア (1) ～思考のドキュメンタリー」、「ジュディス・バトラーを読む (2) 思考のパフォーマティヴィティ」(以上、本間)、「レヴィナスを読む (1)・(2)」(家高)、「文化現象としての科学技術」(小林)、「Bioethics in English」(霜田)、「人と環境の倫理」(紀平)。

(家高)